方向

第一二八号　一九九一年四月五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

春夢女史の『誰が罪』（三）

1991 3 25　原田憲雄編

第四回

天を恨まず人を羨まず身の不幸は以て生れたる因果と悟を開ける人も折に触れ事に当たりては感慨胸に迫り天を仰き地に伏して己が不運を呟つまして一家団欒の中に成人なりて世の憂事も知らぬ身が一朝母に別れ父兄弟に遠く離れて一人孤客の身となりぬる倭文子が心細さはいかに春の朝には父諸共に上野向島の花に遊びし昔の楽しさを思ひ出で秋の夕には母の膝下にうれしと思ひし慈愛の言葉の忍ばれてあはれ父上なつかし母上恋しと片時も忘れかねたるぞ道理なり然れど慈愛ある父母の如き師に励まされ優しき姉妹の如き友人に慰められて月日を送りいつしか八年の星霜を重ねて早くも今年は卒業の時となりぬ余り勉強の忙しさに且つ研究たき事もあればとて此冬休には四谷へ帰らじと決し正月の三日間は例の加留多に遊び暮し四日目よりは書籍室に打籠りて本と首曳の大奮発友は見て謗るもあれば誉るもあり今日も例の如く暖炉の前なる卓に倚り片辺にウエブスターの辞書をひかへ頻りに英書を繙ける折しも戸を開く処女ありこは倭文子と同級同室の無二の友なる照子といへる者なり軽く倭文子が肩に左手をかけ右手に封書を持ち

「倭文子さん四谷のお内から使いが来て此お手紙を以てきましたよ」

「あらそう有難う何の用でせうね」
心の中には祖父より帰れとの使ならんと開きて見れば俊次の手跡にて今朝お祖父様外出せんとせし折過ちて敷居に躓跌き倒れしまゝ起も上がらねば驚きてかき入れ参らしゝに早や舌つり手足きかず急ぎ医師に診察を請へへば彼は小首を傾けこは俗にいふ中風といふ病気なり今日明日とは云はねどとても全快は覚束なしといへり日も漸々見えぬ様になり行けば急ぎ此車に乗りて帰り給へとの文意倭文子は余り思ひかけぬ事とて夢心地手紙を見つめしまゝ茫然たり何の用事にかと読み終るを待ちかねし照子は倭文子の顔を覗き込み
「貴嬢どうなすったの変な顔して何か心配の事でもいってきたの」
いはれて心づきし倭文子は手紙を照子に渡し
「照子さんどうしませう一寸之を見・・・見て頂戴」
と彼女は泣き伏せり照子は容易ならぬ事と急ぎ手紙を読みてはや涙ぐみ倭文子が顔にかゝる後れ毛をかきあげつゝ
「倭文子さんゝゝゝ一所に室へいつて支度をいたしませうねえ而して早くお帰りなさいな先生には妾が断わりにいゝてあげますからね」
と頻りに促して室に連れ行き何かと世話なしやがて門まで送りいでゝ
「貴嬢あんまり心配なすつて体に障らぬ様にして頂戴よさようなら」
と思わず倭文子が手を握りぬ人は何事もなき時親切になりしよりも艱難悲憂の時受けし親切は一層嬉しく忘れ難

きものなり倭文子は照子が親身の親切身しみて余りの嬉しさにいふべき言葉もいでず握られし手を固く握り返して力を入れ

「照子さん誠に有難う貴嬢の御親切は忘れませんよ」

車に乗りながら

「道子さんと花子さんに逢ひませんでしたから貴嬢からそういってヒ下いね」

斯る折にも日頃の親しき友を忘れぬ心根の優しさよ

※　※　※　※　※

一週間を経て倭文子は力なく四谷より帰りぬ食事もろくにせず深く打沈み居るにかの優しき照子は痛く案じ気分やあしきお祖父様をや恋ふてかゝる憂目は御身のみかは道子様も我身も父母共に亡きものを思い明らめ給へなど心の限りを尽くして慰めけり

その翌日未だ倭文子は心進まぬながら授業を終へて室に帰れば机上に封書あり裏を返して見れば思ひもよらぬ帝国大学文科寄宿舎にて岡野一郎とあり倭文子は不審に思ひどうして此方が妾の所に・・・あゝわかった兄様が国へ帰った事でも尋ねて来たのであろうと独りきめて開封為せば倭文子が思ひし如く第一着に俊次の帰国まことかきゝたしとは有れど重なる意は玄石に死に別れその上俊次と別れし倭文子が淋しさを慰め又我が如き者にても力にならば何事にても勉むれば用もあらば申しお越せよといと同情を汲みたる優しき文なりき倭文子はさしても知らぬ人の親切訝かしく喜ぶよりも気味悪しくて返書も出さゞりき

第五回

倭文子が岡野より手紙を受けてより三日目の日曜の午後取次の女に名刺を出して藤井倭文子様に御面会致したしと案内を請う者あり女は之を倭文子に通じぬ倭文子等は日曜の事とて照子を初め道子花子等も共に打集ひて若き者どしのさして可笑からぬ事にも腹を抱へて興しげる折からなりけり倭文子は名刺を見て思はず顔を赤めぬ何も知らぬ女は

「貴嬢様のお兄様でございませう下の応接室にお通し申して置きました」

と彼女はいで行きけり花子は自分の傍なる机に倭文子が置ける名刺を一寸と手に取りて

「岡野一郎・・・何方の事兄様じやないでせう」

「えゝ兄様の友だちなのねえ照子さん此間手紙をくださつたあのお方よ」

岡野とは何者なるかの弁解を自分と彼との関係をよく知れる照子に頼みたるが如し逢ひともなき倭文子は乱れ髪をかき上げつゝ愚図々々して居るに照子は迂遠しく

「貴嬢早くなさいなねあんまり待たせてはお気の毒じやありませんか」

「でも逢うのが嫌ですもの」

其暇に照子より岡野のことを聞ける道子らにも早くゝゝとせかれて詮方なく倭文子は応接室に行き静かに戸を開けば待ち侘びたる岡野は倚子を離れなつかしげに倭文子が入り来るを眺めたり眼鏡の光線に射られし倭文子は宛なから白眼れし心地して急に頭をたれしまま暫時と挨拶すれば彼も鸚鵡返しに暫時といひて両人とも倚子につき

ぬ恰も岡野が発語を待つかの如く倭文子は恥かしげに格の辺を弄びつゝ控ゆるに岡野は強てうち解けたるが如く

「貴嬢先日差上げた手紙をご覧になりましたか」

「はい」

岡野はこの極めて冷淡なる返事に少しく張合ぬけ鳥渡躊躇なせしが笑ひに間を塞ぎ

「何の御返事も有りませんでしたから多分お怒りになつたのだと思ふて実は今日其お侘に参ったのですアハ・・・」

之にて大に場は賑へり倭文子も今はやゝ打解け

「いゝえ決して左様じやございませんけれど字が余り下手なものですから」

一寸岡野を見上げて直又俯き笑ひを含んで今度は羽織の紐を指の先に巻つけては解き解きては巻きつけ居りぬ

岡野は四谷の家に倭文子を見てしより五年間心に画きて片時も忘れ兼たる可愛らしき眼と無邪気なる姿の今日はかの時にも増して清く麗はしきに彼女が下むけるを幸に暫時話もなくて眺め入たり

岡野は最初より倭文子を慕へり然れと世の浮る人の恋の如きに非ず彼は其目と其姿に恋せしに非ず倭文子が玄石と俊次に対するに優しく且つ寛容に癖なき性質が何辺ともなく岡野が石の如き心を迷はせしなりあはれ尊き倭文子世に一人の恋しき倭文子我が終生の友と為すべきは広き世界に只彼女あるのみと恐ろしき迄思ひ込めり然れど我一人思ひたりとて倭文子の心は如何に岡野は毎度か自分の心を倭文子に打明けんとせしが彼女は未だ年も若く修業の身我も同じ境遇なるによしなき事いひ出して可惜乙女心を驚かさんも無益の事然り我は我が成業の日迄待

つに然かじと厳しくも決心しつ折々は俊次が許を訪れて他ながら倭文子が安否を聞きしかと彼女をば今日まで音れざりき然るに今度玄石の死と俊次の帰国とを聞き倭文子が嘆の程思ひやられ哀にもあり気の毒にもあり最早我者の如く思へる彼女が悲しみを見過ごし難く倭文子に逢ふて其憂心を慰めやらねば心すまずさてこそ男子は誰も入り憎きといふ女学校の門を屈入て今日しも音れしなり長く逢はざりし倭文子が大人びて髪を上巻に結びたる所の変りはあれど岡野が愛せし点は一も損はれで猶前よりも増りて見へけり岡野はふと心づき急に目を側に反し今初めて見しかの如く倭文子を鳥渡見て

「どうもお祖父様はとんでもない事でしたなあさぞ貴嬢はお驚きなさつたでせう」

「はい余り急でございましたので・・・」

「それに俊次君もお国へお帰りになつたそうですが尚お淋しいでせう」

倭文子は無言岡野はなほ言葉をつゞけ

「去年四谷のお宅へあがつた時貴嬢は今年ご卒業の様に承りましたがあれほどお祖父様が楽しみにしてお出になつたのに甚だ残念の事を致しましたなあ」

「卒業は卒業でございますがどうせ落第を致しますから駄目でございます」

「いやに思いきりが早ひですな貴嬢ほどご勉強家ならばなあに大丈夫です」

「いゝえちつとも勉強家じやございません」

と折角あげし顔を少し赤めて又もや俯けり何を話しかけても倭文子は簡単に返事するのみなれば兎角話とぎれ相

黙せる時のみ多くして岡野には一刻千金の時は徒に過ぎぬ道々斯くも云ひこうも云ひて倭文子を慰めんと考へ来りしも面と相対しては容易に思ふ万分の一もいひ得で益なき話に時を過ごせしを岡野は残念に思ひつゝ真正面にある柱時計を眺むれば早や四時になんなんとす斯くては折角音れしかひなしとやゝ身を動かして

「倭文子さん可笑な事を申す様ですが僕は貴嬢が妹の様に思はれてならんですそれで此度の不幸がどうにもお気の毒で人の事とは思へないんですほんとです偽じやありません」

思はず力をこめ一寸息をつき

「だから僕の様なものでも貴嬢も兄と思ふてください而して何でもお困りの事が有りましたら遠慮なくいふてくださったら僕の力の及ぶ丈の事は致しますから」

頼を失ひ世に捨てられし様に思へる倭文子はこの優しき信実なる岡野が言葉身に染みて嬉しく一瞬に悲しき事思ひ出して涙ぐまれ返事もえいはでもぢゝして居るを岡野は察し

「どうも長居を致しましてご勉強の妨げをしましたまた伺ひます」

と早や倚子を離れぬ倭文子は知れぬ様に鳥渡涙をぬぐひて

「態々お出くださいまして誠に有難うございました」

「いや失礼致しました不満事ばかり喋口ましてアハゝゝ」

倭文子は彼を戸口まで送り出で帯に挾みありし先の名刺を取いだして暫時眺めける

歌人・大塚五朗　（一九）

1991 3 26　原田憲雄

伊賀行

一九三七年（つづき）　五朗、四十歳。

『水甕』昭和十二年八月号。

五月中旬河内金剛山に遊ぶ

杜（もり）深くあるがさびしき水分（みくまり）の社めぐりて春蝉の声　（庭四七・金剛山紀行四首）

千早村にて

山深く入りてわが来つ自動車ゆ降りたてば寒し谷川の音

村の中に谷川を持ちて人安けし少女（をとめ）下り来て米（よね）とぎながす　（庭四七・同）

昼めしを喰ひつつ仰ぐ檜（のき）近く迫りてにほふ山の若葉は（栗の花はにほふも）　（〃・〃）

金剛山上にて

昼がすみかすみて深き谷の底にこだまをかへす筒鳥のこゑ

観心寺への道

夕靄の下りてしづめる峡の村道べつづきは豌豆の花

歯に酸ゆき夏の蜜柑をたうべつつ夕べ露おく道を歩めり

観心寺の下に部落あり、寺元といふ

山門を入（はい）る即ち顔うちて椎の花風は庭にあふるる　（庭四七・観心寺）

九月、十月号の切り抜きは残っていない。

十一月号。

八月中旬伊賀の国に遊ぶ。折柄帰省中の友人に迎へられてその家に一泊。友は去年母を失ひ、家は老父とその孫なる男児とただ二人にて静かに農事にいそしんで居る（。）

日の暮を着きて先づ入る大き土間鶏の糞をわが踏みにけり　（庭四八・伊賀行、森永氏生家）

夕土間にむしむしにほふ鶏の糞男ばかりの家荒れてをり　（〃）　（続風土三七）

夕立の遂にそれたるむし暑さ魚やくにほひは隣の家か　（続風土三七）

夕焼がやがて夜空となる頃のものひもじきを鳴ける蜩（ひぐらし）　（庭四八）

夕霧の川より湧くや川土手の南瓜の花は黄にしめらひぬ　（〃四九、続風土三七）

伊賀伊勢の境と聳（た）てる布引の青夏山は寄る雲もなし　（庭〃）

山痩せて木草育たぬ赤埴の伊賀の山辺は夏の日あつし　（〃）

はざまゆくと心さびしきわが顔にはらぎて杉の雫は涼し　（洛北雲ケ畑）

山の秀（ほ）に夕立あとの日はさして谷いつぱいの蜩のこゑ　（庭三五・雲ケ畑三首）

山裾の乏しき土を田に平（なら）しこの谷人は住み足らふらし（〃）

山深く木馬の道は拓かれて香にたつ杉を伐りて下せり　（〃）

『京都風土記』の「伊賀に遊ぶ」がこのときのことを描く。長い文章だが、短く節録しておく。

Mさんが、その郷里の伊賀へ連れて行つてやらうといひ始めてからもう三年にはなるだらう。……七月の終り頃、不意に、

「ひよつとしたらあの伊賀の家を引払はなければならぬかもしれぬ。だから今年は是非行かう。八月の十日前後は日をあけておけよ」

といふ話だ。……いそいそ承諾した事はいふまでもない。元来私は旅が大好きなんだけれど、……漫然と出かけて行つて、気に入つた所には二日でも三日でもじつとしてゐたい方なんだ。……ところが……旅もたゞ一日きりの旅になつてしまつたし、着いたその瞬間から、伊賀の上野見物、赤目四十八滝、香落渓、室生寺の見物と……能率的に見物して、すぐ引き返すといつた……ものになつてしまつた。しかし伊賀の印象として、私の心にやきつけられてゐるものは、やはり赤目でもなければ、香落でも室生でもない。鶏の糞くさいMさんの生家に於ける一夜の泊りの上にあるのだ。

一日を歩き疲れて辿り着いたMさんの家の前で、井戸から汲み上げて飲んだ水のうまかつたこと。……屋敷の前にある桑畠の桑の緑がしつとりとした夕露を含んで美しかつた。……どこかで牛が鳴いてゐて、正に田園はたそがれのさびしさである。……

Mさんの生家は、お母さんが亡くなつてから、お父さんと、Mさんの長男道夫君とのたつた男二人の世帯。その男二人があれやこれやと気を揉んで作られた晩餐。地酒にしては芳醇な酒。蚊いぶしの煙のたちこめる中で、何とまあ嬉しい饗宴であつたことか。....

やがて酒好きなお父さんも一緒になつて、盃をあげながら、農村の住みにくくなつたこと、それでも自分の生れた土はすてがたいこと、この土地は古い昔、大和から伊勢に越える本街道で、可成殷賑を極めたものだといふこと、....さてはどこの誰が嫁を貰つて、どこの誰が嫁に行つたといふやうな、私にはかかはりのない話までが、馬鹿に親しみ深く聞かれるのであつた。....

伊賀の国は平明な国だ。私はもつと山国らしい暗さと鋭さのある国かと思つてゐたのに、阿保・名張・美旗かけての平明さ、おだやかさは私を驚かせた。伊勢境の布引山が東の空を区切つてゐるのと、倶留尊山一帯の山が南に聳えてゐ、鈴鹿山脈が北の近江境をなしてゐるのが、山国らしいといへばいへようか。寂しい位平明なのだ。

この年はこれ以後、短歌作品がなかったのか、わたしの切り抜きが欠けているのか、十二月号から昭和十三年二月号まで詠草がない。

一九三八年　五朗、四十一歳。勤務先、住所、前年に同じ。松子、四十歳。朗、十八歳。喜子、十四歳。樹、十歳。哲、七歳。迪子、四歳。

一月、五朗は水甕社の同人となった。

母の入院

1991 3 27　原田　慶

おばあちゃんに見せてあげてから納おうと言って、娘は雛段をそのままにしていた。三月九日に退院してきた母とわたしと三人で、お雛さまの前でさくら餅を食べ、名残りを惜しんで、十一日にやっと雛道具はかたづけられた。

昨年の十二月十一日に、母は股関節の手術をして、人工関節を入れてもらった。数年前から滋賀県の整形外科病院に通っていたが、だんだん、右足の膝まで痛みが激しくなり、半年くらい前からは、眠れないほどになっていた。総合病院へ行ったところ、手術をするより治す方法がないと言う。母は、恐れて手術をいやがっているうちに歩くことさえできなくなった。心配した母の妹である叔母が、電気治療の機械を買って、一月間、自分の家で母の治療をしてくれたが、あまり効きめがなく、痛みがとれない。そんな時に、京都に股関節の手術の名医がおられることを聞き、わたしは母を十月の末日に京都へ連れてきた。数日その医院へ通ってから、手術をお願いしたが、母が年をとっているので、個人病院では手術ができないからと、京都の大病院に紹介してくださった。そんなにむつかしい手術ならやはりやめておこうかと、また迷いが出て、しばらく様子をみていた。何もしないでは治るわけもないので、もう一度、近くの整形外科を訪ねてみると、その医師も手術を勧められて、先に断わられた名医さんを紹介された。仕方がないので、わたしもさんざん考えた末、最初に手術を勧められた滋賀県の病院に行くことにした。それが十一月の中頃だったが、入院を予約して待っていると、案外早く、十二月五日に

入院できることになった。

十一日に手術がすむと、その夜からしばらくは回復室に入る。わたしは妹達と交代で付き添って、二晩か三晩続けて泊まり、一日か二日帰るというようにして、落ち着かない日を過ごした。母はもとから少し不整脈があったので、手術した夜は、その方で心配された。心臓のモニターをつけて、看護婦室でいつも見ていられるようにするらしかった。機械がうまく働かなくて、何度もつけ換える。トランジスターラジオのような黒い箱にボタンの付いた線が五本くらい出ていて、そのボタンのようなのを、胸に貼りつけるのだけれど、何台もとり換えて、一晩中ざわざわしていた。

数日はあわただしさの中で過ごしたが、不整脈ももとからあった症状で、特に心配されるようなものではなかったようで、段々落ち着いた。病院は夜九時に消燈、朝は七時に廊下の電灯がつく。看護婦さんが「お早ようございます」と来られるので、それまでに着換えて顔を洗い、布団を畳んでおく。母にタオルを渡す。八時に朝食、それがすんで、看護婦さんが、病人の身体を熱いタオルで拭いてくださる。そして掃除の人が来て、床を掃き、棒雑巾でふいてゆく。うろうろしていると昼食である。午後は回診の先生が来られる。夜が早いので、ほっと息をつくともう消燈になる。電灯を消しても眠れるわけではないが、暗いので何もできない。窓から外を見ていると、少し向こうの国道を自動車のライトが明るく流れている。ずっと遠く琵琶湖の畔の背の高いホテルの電燈が、空に光っている。二十階くらいあるのだろうか。いちばん上に赤い電燈が点滅して、飛行機に注意を呼びかけているのだろう。ずっと後で、初めてベッドに座った母が、夜に、外の景色を見て、あんなところに遊園地がある

のだろうかと言った。麻酔をして、身体が疲れると現実ばなれしてしまうものらしい。と言うより、病院というものは、人の心を現実から遊離させる働きを持っている。わたしまでが、窓から夜の風景を見ていると、自分がどこに居るのかわからなくなってしまうのだから。

わたしはぼんやりしてしまわないように、ふき掃除をしたり、小さな鍋を持ってきて、おかゆやうどんを炊いて食べた。お風呂のある日は必ずはいった。風呂場は、身体の不自由な人が、車椅子で入れるように広くしてあり、湯船はわくが低く、中は二段になっている。コンクリートの長方形のいくらか浅いもので、水と湯を二つの蛇口から、自由に入れられるようにしてあった。洗い場には、小学校で使っていたような木製の椅子が置いてあって、足を曲げられない人が使うらしい。タイルなどの飾りは少しもない実用的な浴室だった。

母は、金属の人工関節を入れてもらったので、足は自由に動かせないものの、すっかり痛みがとれて、不思議にさえ思っているらしい。回診の先生や看護婦さんに、精一杯にこにことお礼を言っている。手術の直前まで、恐ろしくて涙を流していたのだった。

そのうちに少し足が動かせるようになり、ベッドから下へ降りてもよくなると、尿道に入れてあった管が抜かれ、ベッドの下で、ポットを使って用を足せるようになった。初めは看護婦さんに世話をしてもらったが、要領がわかるとわたし達でする。母は、わたしがすると蓋を閉める音が大きいと言っていやがる。妹にも、「姉ちゃがするとなんであんなに音がするんやろ」なんて言っている。わたしはだんだんいやになってきて、「そんなこと言うのならコールボタンを押して、看護婦さんに頼んだらいいわ」と言って、知らん振りをしていた。母はも

じもじしながら困っている。わたしは意地になってしまって、外へ出て待合室に座っていた。仕方なく、母は看護婦さんに頼んだらしかった。外にいる間に、わたしはどうして音がするのか考えていた。ポットはプラスチック製で空洞になっているし、床はコンクリートだから、誰がしてもポンと音がする。看護婦さんは、初めに蓋を開けたらそのままで、最後に中の容器をもどして閉める。つまり、一度しか閉めないことになる。私はベッドの下に持ってきて、母が使うと閉めて、母をベッドに寝かせる。それから隅のほうへ持っていって中の容器を取り出し、また閉めてから捨てにゆく。帰ってきて容器を入れて閉める。三回も蓋を閉めているのだった。だからポンポンと音がする。それほどの音でもないが、使っている本人にすれば羞恥心があるから、なるべくそっとしてもらいたいのだろう。仕方がないので次からは気をつけて、一度しか閉めないことにした。

土曜の夜は、下の妹が泊まることが多かったが、母は、日曜にはよく調子をくずし、吐いたりした。回診もなく、外来患者もなくて、病院が静かなので、病人は不安になるのだろうか。他の日は、人の出入りが多く、呼び出しの放送など、とにかく賑やかなので、ベッドにいる人も気がまぎれているのだと思う。

それでもだんだん日がたって、わたしは少しずつ本を読む時間もできた。見舞いの人や巡回や、様々の人の出入りにまぎれながら折口信夫全集を、同じところばかりぐるぐる読んでいた。わかったようでまたわからなくなるのだった。正月も近づいて、家では主人と娘が掃除に忙しい思いをしているのだろうが、病人はまだ歩けないので世話が要る。車椅子でトイレに行けるように、わたしはベッドの下の狭い空間で、車椅子を自分で動かして母に見せた。「面白いわ、こうしたら簡単に乗れるんよ、この椅子でトイレに行ったら、後は、ここでポットを

使っているのと同じようにしたらいいのよ」と言ってさそった。母は笑って、なかなか乗ろうとは言わなかったが、何度もわたしが見せているうちに、仕方なく車椅子に乗った。自分の手で輪をまわして動いていった。だいたい何でもやればできるのに、ためらってばかりいて、行動に移さない。わたしほどにおっちょこちょいでないが、何といっても子は親の鏡、母とわたしは悪いところほどよく似ている。

十二月二十八日に回復室を出て個室に入った。室代が、老人で一日六百円くらいのふつうの部屋である。下の妹が、クリスマスには、お菓子の入った赤い長靴を買ってきたので、わたしは正月のお飾りを買って病室の机に置いた。部屋が変ってからは、ずいぶん落ち着いたので、母は、ベッドに座って千羽鶴を折っていた。母の家の近所の人が次々とお見舞いに来て、慰めてくれる。正月には、静岡にいるいちばん下の妹も、家族で来て、母の留守の家に泊まり、妹だけが病院に付き添ってくれた。わたしは家に帰ってお節料理をつくり、妹の家族の分も持っていった。病院では、お雑煮や海老などのお正月料理がついた。いちばん下の妹が帰ってしまうと、わたしは病室の床にビニールと新聞を広げて、座布団に座り、椅子を机代わりにして、まだ書けていない年賀状をしたためた。病院にいる時は湾岸戦争のことは忘れてしまう。個室にいると、他の人達ともあまり顔を合わさないので、廊下で出会う人にだけ挨拶をする。

二人の妹達も手伝って千羽鶴はどんどんできていった。これが折り上がる頃には退院できるかと思っていたが、まだなかなか長くて、母は、退院するまでの、動けなかった半月ほどを除いて、二か月半くらい、毎日折り続け、他に千羽ふくらすずめと、薬玉を三十六個くらい作ったという。薬玉は一つに、三十七個の花を束ねて作るので

ある。食事やリハビリ、面会の時の外は目の開いているかぎり折り続けたらしい。次々と退院して行く人にあげ、病院で働いている人にあげて、看護婦室やリハビリの部屋にも吊るしてあった。退院する時、見送っていただいた看護婦さんに「また折り紙をして、手先を動かすことを忘れないでね」と言ってもらった。

個室に変ってリハビリに行くようになった頃はたいへん寒かったが、わたしは母を車椅子に乗せて外へ行き、病院の建物がどうなっているのか説明した。それで、母は自分がどういう所に居るのかはっきり知った。リハビリ室では段階をふんで少しずつ運動が進んだ。まず両足首に砂袋を巻きつけて足を振る。砂袋は二キログラムから三キログラムまで進んだ。持ち上げると、かなり重い感じがした。それから、ベッドに横になって、平たいゴムの帯で両足に輪をかけ、右足を右へ、ゴムを引くように開く運動をする。ずっと日が過ぎてからは、平行棒の間を歩いたり、外へも歩きに行った。階段を上がったり、正座や、這って立ち上がる動作を練習した。

リハビリセンターの人を見ていると、ずいぶんいろいろな人がある。箸で豆粒をつまんでいる人、細い短い棒を一本ずつ、穴にはめて林のように立てている人、ボール投げをしている人もある。回転式のマットに張りつけてもらって立っている人や、マットの上で転がっている人、訓練士さんにマッサージや手足の曲げ伸ばしをしてもらっている人もある。どの人も顔をゆがめて真剣である。お婆さんが入院していて、お爺さんが朝から夜まで毎日病院へ来ている夫婦がある。お婆さんは歯が抜けて顔がゆがんでいる。お爺さんは青い毛糸の正ちゃん帽をかぶり、眼がねをかけて赤い頬の桃太郎のような顔をしている。七十歳はとうに過ぎているだろうが、二人で手をつないでリハビリに来る。お爺さんが手伝ってお婆さんに運動をさせる。高いベッドに上がるのに踏台がいる。

「お父さん、もひとつ高い椅子をさがして来てえなあ」
「これか、これでええのか」
「はあ、それやったら、こうしてベッドに上がれるのや」
とお婆さんが運動を始める。一種類が終ると、
「次ぎ、早うせんかい」
「そやかて、次ぎ、何するのかわからへんのや。お父さん、先生にたんねてきてえなあ」
「今日は土曜日やさけ、先生やすみや。今日は先生が少ないし、みんなようけ患者さん持ってはって忙しい。このまえ教えてもろたやろ、あれをやれ」
「ええ、あれか、ふうん、どうやったいな、…よいしょっ」
お婆さんは足を片方ずつ頭のほうへ上げる。それだけでも大変らしい。
「いーちい、にーいい」
息を切らして頑張っている。思わず笑い出しそうになるのをこらえて、わたしは母のほうへ目をやる。母はこともなげに、砂袋をつけた足をぶらぶら振っている。
平行棒の間には、老人ホームから来ている小さいお婆さんが、異様なばかりに目を輝かせて立っている。好奇心のかたまりの幼児のように見えるが、少し呆けがあるらしい。訓練士さんが、
「これ、お婆ちゃん歩かんかいな、そんなとこで止まってたらあかんがな、きばって歩かんと、めんめするで」

などと言う。近くにいた人達が笑うと、その人も、目をキラキラさせて笑ったように見えた。

一月十八日になって、母は六人部屋のほうへ変った。母のいた室には、目の手術をした若い男の人が二人はいった。個室にいる間、わたし達は交代で泊まっていたが、総部屋に行ってからは付き添いをせず、病院のすぐ近くに住む妹が、毎日、リハビリと洗濯物を取りに通ってくれた。下の妹とわたしは時々行けばよくなったので、わたしは母の退院の準備を始めた。独り暮らしの母を、いきなり不便な所へ帰らせることはできない。介護用品の店に行って必要なものを整えた。さる事情であけてあった寺の借家がとなりにあるのを、母のために借りようと思った。長らく使っていない部屋を掃除した。ガラスを磨き、カーテンを更え、トイレを洗い、雪の舞う中を走りまわった。困ったことは、トイレが狭くて、足の曲げられない母のために据置き台をとりつけると、身動きできないのである。様子を見に来た主人が、これではとても無理だといって、据置き台を自分で寺のほうへ持って行き、こちらのほうが広いではないか、といってくれた。わたしはできるだけ迷惑をかけないようにと一生懸命だったが、主人が、母を寺でいっしょに世話するようにと言っているのだと思うと、何とも複雑な気持で、いっぺんに気が抜けて、急に寒さが身にこたえた。

退院した母は、以前の痛みもとれ、身体にもたいした不自由はなくて、編物や折り紙をし、散歩をし、ゆっくりと養生している。わたし達も、母の居る生活にすこしずつ慣れたけれど、わたしは自分のことも含めて、高齢化社会というものを、真剣に考えずにはいられなくなってきた。

なんとかして最後まで、自分の足で歩き、自分の手で働いていたいものだと思っている。

信解品

—法華経巡礼 58—

1991 3 27 原田憲雄

『法華経』の第四の章にはいる。

妙本すなわち妙法蓮華経では「譬喩品」とともになお第二巻だが、正本すなわち正法華経では第三巻である。

梵文では、「adhimuktiと名づける第四章」と題する。adhimuktiは、mucという動詞にadhiという副詞を加え、名詞形にしたものである。adhiは「上に、大いに、内に、其の他に」などの方向に「優れる」ことを表わす。mucは「解放する、免れる」などの意をもち、「解脱」などと漢訳される。adhimuktiを、妙本が「信解・しんげ」と訳すのは、理解し、信じることが、悩みや苦しみからの解放につながることを示し、正本が「信樂・しんぎょう」とするのは、理解し・信じることを「願い求める意思」に重点をおく訳なのであろうか。

4-1. そのとき、長老スブーティ、長老マハーカーティヤーヤナ、長老マハーカーシャパ、長老マハーマウドガリヤーヤナは、このようなこれまでに聞いたこともない法を、世尊からじかに聞き、また長老シャーリプトラの無上の正しい覚りについての授記を聞き、奇異な、不思議な、大歓喜がわきおこった。そこで座より立ち上がり、世尊のほうへ歩みゆき、右の肩をあらわにし、右の膝を大地に着け、世尊に合掌礼拝し、世尊にむかい見上げて、身をかたむけ、身をまげ、身をくぐめ、そこで世尊にこう言った。

atha khalv āyuṣmān subhūtir āyuṣmāṃś ca mahākātyāyana āyuṣmāṃś ca mahākāśyapa āyuṣmāṃś ca mahāmaudgalyāyana imam evaṃ-rūpam aśruta-pūrvaṃ dharmaṃ śrutvā bhagavato 'ntikāt sammukham āyuṣma-

taś ca śāriputrasya vyākaraṇaṃ śrutvā 'nuttarāyāṃ samyak-saṃbodhāv āścarya-prāptā adbhuta-prāptā audbilya-prāptās tasyāṃ velāyāṃ utthāy 'āsanebhyo yena bhagavāṃs tenopasaṃkrāmann anupasaṃkramann (W:----------) yaikāṃsam uttar 'āsaṅgaṃ kṛtvā dakṣiṇaṃ jānu-maṇḍalaṃ pṛthivyāṃ pratiṣṭhāpya yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇāmayitvā (W:praṇamy) bhagavantam abhimukham ullokayamānā avanata-kāyā abhinata-kāyāḥ praṇata-kāyās tasyāṃ velāyāṃ bhagavantam etad avocat //

4-2. わたしたちは、世尊よ、老衰がくわわり、高齢で、ビク団のなかでは上座とみなされていますが、老いぼれて、涅槃に到達したと思いこみ、世尊よ、無上の正しい覚りをえようとする努力を避け、気力もなく、立ち向かおうとはしませんでした。世尊が法を説かれるとき、ながいあいだ世尊はその座においでになり、わたしたちもまた説法の座に、げんにいたのです。そのとき、世尊よ、ながいあいだ坐って、おそばにおりますと、足腰がいたみ、節々もいたみます。それでわたしたちは、世尊よ、世尊が法を説かれたとき、空・無相・無願はすべて明らかになりましたが、わたしたちはこれらの仏の法や、仏の国土の荘厳、ボサツの遊戯や如来の遊戯について、それらを得ようと渇仰（かつごう）しませんでした。なぜなら、わたしたちは、世尊よ、この三界から逃れ出て、涅槃をえたと思い、老いぼれていたからです。だから、世尊よ、わたしたちは、他のボサツたちに、無上の正しい覚りについて教えたり、命じたりはしたのですが、ところが、世尊よ、わたしたちじしんは、一度もそのことを渇仰する心を起こしませんでした。そのようなわたしたちが、世尊よ、いま、世尊から、声聞たちも無上の正しい覚りを得られようとの授記をうかがい、

奇異な、不思議なおもいがし、大きな利益をえました。世尊よ、いま、ふいに、このようなこれまで聞いたこともない如来の宣告を聞いて、大きな宝を授けられたのです、世尊よ、無量の宝を授けられたのです、世尊よ、探しもせず、求めもせず、心がけもせず、願いもしなかった、このような大きな宝を、わたしたちは、世尊よ、授けられたのです。明らかになりました、わたしたちに、世尊よ。明らかです、わたしたちには、スガタよ。

vayaṃ hi bhagavañ jīrṇa vṛddhā mahallakā asmin bhikṣu-saṃghe sthavira-sammatā jarā-jīrṇī-bhūtā nirvāṇa-prāptāḥ sma iti bhagavan nirudyamā anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhāv apratibalāḥ smāprati-vīry'ārambhāḥ sma / yadā 'pi bhagavān dharmaṃ deśayati (W:deśayaiti) ciraṃ-niṣaṇṇaś ca bhagavān bhavati vayaṃ ca tasyāṃ dharma-deśanāyāṃ pratyupasthitā bhavāmaḥ / tadā 'py asamākaṃ bhagavan ciraṃ-niṣaṇṇānāṃ bhagavantaṃ ciraṃ-paryupāsitānāṃ aṅga-pratyaṅgāni duḥkhanti saṃdhi-visaṃdhay-aca duḥkhanti / tato vayaṃ bhagavato dharmaṃ deśayamānasya śūnyatā-nimittāpraṇihitaṃ sarvaṃ āviṣkurmo nāsmābhir eṣu buddha-dharmeṣu buddha-kṣetra-vyūheṣu vā bodhisattva-vikrīḍite-ṣu vā tathāgata-vikrīḍiteṣu vā spṛhotpāditā / tat kasya hetoḥ / yac cāsmād bhagavaṃs traidhāt-ukān nirdhāvitā nirvāṇa-saṃjñino vayaṃ ca jarā-jīrṇāḥ / tato bhagavann asmābhir apy anye bo-dhisattvā avavaditā abhūvann anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhāv anuśiṣṭāś ca na ca bhagavaṃs tatrās-mābhir ekaṃ api spṛhā-cittam utpāditam abhūt/ te vayaṃ bhagavann etarhi bhagavato 'ntikāc chrā-

vakāṇām api vyākaraṇam anuttarāyāṃ samyak-saṃbodhau bhavatīti śrutv āścaryābhuta-prāptā mahā-lābha-prāptāḥ sma bhagavann adya sahasaivemam evaṃ-rūpam aśruta-pūrvaṃ tathāgata-ghoṣaṃ śrutvā mahā-ratna-pratilabdhāś ca sma bhagavann aprameya-ratna-pratilabdhāś ca sma / bhagavann amārg-itaṃ aparyeṣṭaṃ acintitam aprārthitaṃ cāsmābhir bhagavann idam evaṃ-rūpaṃ mahā-ratnaṃ pratil-abdhaṃ / pratibhāti no bhagavan pratibhāti naḥ sugata //

「空・無相・無願」は三三昧（さんざんまい）とも三解脱門（さんげだつもん）ともいい、覚りに通じる三つの道である。空は、もろもろの事物が因縁によって生じたもの、すなわち縁起しているもので、固定的実体がない、と観じ、自我の実体や世界を構成するものの永久恒存を否定する考え方を身につけること。無相は、物事には固定的、実体的なすがたはなく、特別の形相をもたない、と観じ、差別対立を超えた考え方を身につけること。無願は、特別の欲求や目的をもたず願望を離れた状態になるような考え方を身につけること。この三つの道に通じると、いわゆる「無漏」、煩悩のけがれのない境地に達するとされた。小乗のビクたちにとっては最も高いアラカンの境地である。

中国の詩人と仏教（一二）

原田憲雄

一四、竹林の七賢

魏という朝廷は、曹丕が皇帝になったのが二二〇年ですが、二六五年に重臣の司馬炎が皇帝になり晋という朝

をたてるまでの四十五年間しか続きません。しかも二五〇年ころからは司馬氏が実権を握り、反対派を抹殺してゆく時代でした。この魏末晋初の険しい時代に、権力者に批判的な知識人の集団として有名なのが、「竹林の七賢」なのです。阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎がその七人で、かれらは世の俗事を嫌って竹林に集まりシラミを捻りながら高尚な清談を楽しんだといわれ、さまざまな逸話が伝えられ文人画の主題としても好んで取り上げられました。しかしこの七人は、思想も、生き方もさまざまで、このむつかしい時代に同時に一緒に遊んだことがあるかどうかも確かではなく、かれらをひとまとめにして「七賢」と呼び、その会合の場所を竹林に仕立て上げたのは、三一〇年ころから後の好事家たちだろう、というのが今日の通説です。

とはいっても、かれらのひとりひとりが当時の思想界の代表的な人物であったことは間違いありません。かれらのうちに仏教に言及しているものがあれば、そこからかれらの仏教に対する見方が伺えるわけです。

阮侃というひとが、地相や家相が長寿や幸運と関わりがあると信じることの不合理を論じたところ、嵇康が反論しているのですが、阮の論に「乞胡」ということばが出てきます。「外国人の乞食」という意味で、これがどうやら当時の外来の仏僧を指すらしく、「乞食外国人に従って幸福を求める連中を世間（の知識人）は笑い物にしている」というのです。嵇康の反論でも「乞胡」を阮とおなじ語感で使っています。といって、嵇康が仏僧を世間の知識人一般と同様に軽蔑したかどうかは分かりませんが、おのれにとっての親しいものとしなかったことは感じ取れます。七賢のリーダー格の阮籍にも嵇康にも仏典をよんでいた形跡はありません。だから、「乞食」の思想に、かれらの尊重する老子や荘子の思想と通じるものがあろうとは思わなかったのではないでしょうか。